

# 長崎県感染症発生動向調査速報（週報）

平成31年第15週 平成31年4月8日（月）～平成31年4月14日（日）

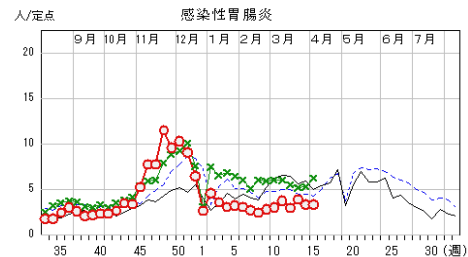
## 定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

### （1）感染性胃腸炎

第15週の報告数は146人で、前週より1人少なく、定点当たりの報告数は3.32であった。

年齢別では、1歳（33人）、1歳未満（21人）、4歳（19人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、佐世保市保健所（6.83）、西彼保健所（4.25）、県央保健所（4.00）であった。

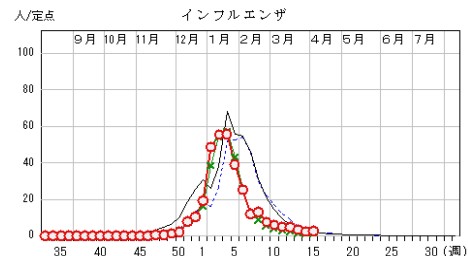


### （2）インフルエンザ

第15週の報告数は177人で、前週より7人多く、定点当たりの報告数は2.53であった。

年齢別では、10～14歳（24人）、30～39歳（20人）、8歳（16人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、県北保健所（20.50）、壱岐保健所（3.00）、佐世保市保健所（2.91）であった。

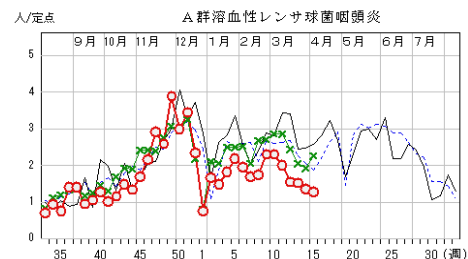


### （3）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第15週の報告数は56人で、前週より4人少なく、定点当たりの報告数は1.27であった。

年齢別では、10～14歳（13人）、5歳（9人）、6歳（6人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、県南保健所（3.60）、対馬保健所（2.50）、県央保健所（2.33）であった。



○ 当年(長崎県)      — 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## 上位3疾患の概要

### 【感染性胃腸炎】

第15週の報告数は、前週より1人減少して146人となり、定点当たりの報告数は3.32でした。地区別にみると、壱岐地区、対馬地区以外から報告があがっており、佐世保地区（6.83）、西彼地区（4.25）、県央地区（4.00）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診させましょう。

**【インフルエンザ】**

第15週の報告数は、前週より7人増加して177人となり、定点当たりの報告数は2.53でした。地区別にみると、上五島地区以外から報告があがっており、県北地区（20.50）、壱岐地区（3.00）、佐世保地区（2.91）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

インフルエンザは、インフルエンザウイルスを原因とする気道感染症で、他の原因によるかぜ症候群より重症化しやすい傾向があります。感染経路は、咳やくしゃみによる飛沫感染と、飛沫等に含まれるウイルスが付着した手指で自分の眼や口、鼻を触ることによって成立する接触感染があります。1日から3日間の潜伏期間のあとに38度以上の発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などの全身症状が突然現れます。これに続いて咳、鼻汁などの上気道炎症が起こり、約1週間で軽快するのが典型的なインフルエンザの症状です。呼吸器、循環器等に慢性疾患を持つ方は、その病状が悪化することもあります。小さなお子さんの場合、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもあります。また、インフルエンザワクチンは、接種すればインフルエンザに絶対にかからないというものではありませんが、発症及び重症化を一定程度予防する効果があります。ワクチンの予防効果が期待できるのは、接種した（13歳未満の場合は2回接種した）2週間から5か月程度までと考えられていますので、ワクチンを接種しておくことが望ましいです。

**【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】**

第15週の報告数は、前週より4人減少して56人で、定点当たりの報告数は1.27でした。地区別にみると、壱岐地区、五島地区以外から報告があがっており、県南地区（3.60）、対馬地区（2.50）、県央地区（2.33）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

本疾患の好発年齢は5歳から15歳で、鼻汁、唾液中のA群溶血性レンサ球菌を含む飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1日から4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により、多くは1日から2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早めに医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

**トピックス：ゴールデンウィークの海外旅行では感染症に注意しましょう**

---

ゴールデンウィークには、多くの方が海外へ渡航されます。海外滞在中に感染症にかからないようにするためには、感染症に対する正しい知識と予防法を身に付けることが大切です。事前に、海外で注意すべき感染症とその予防策を確認しましょう。

（参考）厚生労働省 感染症情報 海外へ渡航されるみなさまへ（外部のページに移動します。）  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/index.html)

## トピックス：風しんに注意しましょう

風しんは、せきやくしゃみなどの飛沫から感染し、通常は発疹や発熱が起こりますが軽微な症状で経過し重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風しん症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦または妊娠する可能性の高い方に伝播させることのないよう、周囲の身近な人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチン接種を実施することが重要です。

本県では、2019年に9例の風しんの発生届の報告がっております。また、長崎県医療政策課から風しんについての注意喚起が発表されています。関東地方を中心に全国では風しんの報告数が例年と比べて大幅に増加しております。30代から50代の男性においては、風しんの抗体価が低い方が2割程度存在していることが分かっています。風しんワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。今後の風しんの動向に十分注意しましょう。

（参考）厚生労働省 風しんについて（外部のページに移動します。）  
[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/rubella/](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/rubella/)

（参考）長崎県医療政策課：風しんに注意してください。  
<http://www.pref.nagasaki.jp/press-contents/371619/>

長崎県における2019年の風しん届出状況

	管轄保健所	患者	診断年月日
1	長崎市保健所	20歳代・女性	H31.1.10
2	長崎市保健所	40歳代・男性	H31.1.17
3	西彼保健所	40歳代・男性	H31.1.30
4	長崎市保健所	40歳代・男性	H31.2.9
5	県北保健所	30歳代・男性	H31.2.28
6	県北保健所	20歳代・男性	H31.3.11
7	県北保健所	50歳代・男性	H31.3.13
8	県北保健所	60歳代・男性	H31.3.14
9	県北保健所	50歳代・女性	H31.3.14

